			第				第	序	
3	2	1	章	3	2	1	章	章	
「豊かさ」の政治経済学 62	帝国からヨーロッパへ 56	コンセンサスの政治 48	「豊かな社会」への変貌――一九五〇年代 47	戦後再建 36	一九四五年の精神 29	起点としての第二次世界大戦 22	福祉国家の誕生――一九四〇年代 21	現代史への視座 1	

目次

3	2	1	第五章	3	2	1	第四章	3	2	1	第三章
サッチャーの退場 141	サッチャーの勝利 131	サッチャーの登場 124	サッチャリズム ―― 一九八〇― 一九九〇年代	不満の冬 113	モラル・パニック 105	英国病 98	「英国病」の実像──一九七○年代	衰退]と 進歩]のあいだで 87	近代化戦略 80	文化革命 72	文化革命の時代――一九六〇年代

年 表	あとがき	3 2	2 1	第七章	3	2	1	第六章
衣献	かき 193	展望 184 タグ	ソファンノブン 79 緊縮政策 174	岐路に立つイギリス――二〇一〇年代173	危機の時代 165	第三の道 158	中道政治の再編 150	「第三の道」――一九九〇―二〇〇〇年代149



ような点が指摘されている。

## **妤章 現代史への視座**

#### 現代史とは何か

第二次世界大戦からEU離脱にいたるまでの戦後イギリスの歴史を概説的に論じるものである。 震撼させたと言われる事件は、 われている。 こうした直 な取り扱 二〇一六年六月、EU離脱をめぐるイギリスの国民投票。 いは |近の歴史を対象とすることは、 イ あ ギリスの歴史家によれば、 るものの、全容は明らかにされてはいない。本書は、 それがもつ歴史的意味合いについては、 こうした同時代史に関わる特有の問題として、 歴史研究では「現代史」ない 結果は衝撃的だった。この世界を その解明を企図しながら、 しは「同時代史」と言 ジャーナリスティック

ギ 歴史に リス史の概念的な枠組みは、まず政治家、 つい ての最初のドラフト の執筆が、 歴史家の仕事であることは滅多に メディアの評論家、 エコノミスト、社会科学 ない。 現代

入機会の喪失、戦後コンセンサス、サッチャリズム、消費社会、無階級社会、人種差別 りてきている。たとえば、イギリスの「相対的な衰退」、「ヨーロッパ」へのイギリスの参 、社会政策の専門家の仕事となる。実際、私たち歴史家は彼らからさまざまな概念を借

(A Companion to Contemporary Britain 1939-2000, p. 2)

史化する最初の挑戦とは、そうした概念の有効性そのものを検証することにある。

福祉国家の退潮、寛容なる社会、南北の分断などである。現代イギリスを歴

ジェンダー、

合的な関係が存在している。 とは限らないだろう。 ンダ(論点)も存在している。 最初のドラフトが歴史家のものでないとしても、さらに第二稿や第三稿も歴史家 歴史家とほかの専門家とのあいだには、 しかし、競合しているとはいえ、 そこにはいくつか共通のアジェ 現代史の叙述をめぐって常 の手に

ら評価されねば いた難問とは、 第一に、 一分析は比較史的なものでなければならないということ。戦後 実はイギリスに固有のものではなく、 ならない のである。 問題への対応の固有性は国際的な観点か のイギリスが 直 面

分析は学際的アプローチでなければならないということ。歴史家には、

政治やビジ

ネスや社会の具体的争点と、目に見えない構造的力学 史」が必要とされ つけることが求 短期 的な事件史レベルでの分析だけではなく、 められる。 るのである。 フランス歴史学のアナール派の泰斗フェルナン・ブロ 中長期的な構造的視点を含んだ「全体 一経済、人口 1動態、 環境 ーデル流 とを結び

法であるが、一○年という歴史を単一の色彩で染め上げてしまう危険性がある。 チをとっている。こうした単純化は、通俗的な歴史でもアカデミックな歴史でも用いられ 本書では、 とくに前半は、一〇年ごとのスナップショットを描くという時系列的なアプロー

焉の一九五○年代、文化革命と産業衰退の一九六○年代、そして戦後の分岐点を迎える一九七 名を着せられてきた時代であった。だが現在では、多くの歴史家が危機と同時に「可能性」の 程として描くよう留意した。総力戦と福祉国家の誕生の一九四〇年代、豊かな社会と帝国 ○年代である。 したがって、本書では多元的な視座を設定して、その一○年をコントラストを含んだ歴史過 一九七○年代は、同時代の言説の影響を受けて「危機」や「混沌」といった汚 一の終

時代であったことを強調するようになり、その再検討が進んでいる。

序章 いた。 後半は、「サッチャリズム」と「第三の道」、そして「岐路に立つ」現在という時代区分を用 それは、前半と同じく同時代史であるとはいえ、あまりに直近の時代であり、歴史研究

開には、長らく三○年原則というものがあった。二○一三年の法改正によって公開のルールは、 の成果もまだ十分に生み出せていない領域だからである。イギリスにおける現代史の資料 の公

が展開されていないという意味では、まだまだ「歴史化」が進んでいない時代なのである。 二〇年へと短縮されたが、研究史の検討ならびに公開された歴史資料の綿密な分析を経た議論 たがって、本書の叙述も、「最初のドラフト」的な手法から抜けきらないものとならざるをえ

見えにくくなってしまうということがあげられる。そこで、具体的な叙述を始める前に、 では戦後のイギリス史を俯瞰的に捉える長期的な視座をいくつか設定してみようと思う。 また、こうした時系列的な歴史叙述につきまとう難点として、繰り返し浮上してくる問 問題が

### イギリスは衰退したのか

退」を論じているのかという点にある。「絶対的衰退」とは、 の「衰退」をめぐる議論で出発点となるのは、「絶対的衰退」を論じているのか、「相対 一○世紀のイギリス史を語るうえで避けて通れないのが、「衰退」をめぐる問題 過去の経済的到達水準を下回る であ 的

ことであり、「相対的衰退」

とは、

ほかとの比較を通じて達成水準が低いことを意味する。

表 1 イギリス経済の相対比較、国民総生産年平均 成長率(1957-1973年)

(%) イギリス 合衆国 西ドイツ Н 本 GDP 国内総生産 3.0 3.7 5.9 9.4 1人あたり 4.7 2.9 2.1 7.8 時間あたり 3.1 2.4 5.7 7.4

出典) Peter Howlett, "The 'Golden Age', 1955-1973", in Paul Johnson (ed.), 20th Century Britain: Economic, Social and Cultural Change (Longman, 1994), p. 324.

験 経 4 済 は 荒 廃 黄 金 L た 時 ス 状 代 態 は を か 5 経 急激 験 L 世 に 7 紀イ 丰 61 ヤ た ・ギリ 0 ッ チ で ź あ ア 経 ッ ŋ 済 プし Ĭ. 西ド は、 た 玉 イ 絶 ٤ ツ Ŕ 妆 0 的 比  $\mathbf{H}$ 較 本 衰 退 に など第 お 0 4 徴 7 次 0 候 世 は み

駧 見

戦

n

相 大 5

対

ず、 済

戦 戦

史家

•

1

4

1)

ン

ン

敗

を 後 のジ

経 0

的 た 衰 L 退 か が 見ら に、  $\exists$ n 1 ると主 口 ッ 張 パ 諸 した。 玉 ゃ Ė

|本と比

較

す

n

成

長

率

0

低

位

は

否定 1) 示 ような考え方 は B に か うても、 Š そ す ス イ 不 n 証 依 0 ギ 利 出 Ū なも 拠 然とし 柏 1) 発 が ではなぜ、「衰退」 対 ス した た でありえても、 か つて叫 的 は のとなって LJ. て全 は な 世 玉 B 界で最 誤謬 地 <u>ک</u> 0 体的 位 0 が ば であっ 比 n は あ たイ E 較 る。 に 転 4 事 豊 好 落 る。 で が繰 ーギリ 実とは異なっ た。 ま か あ L L Ď, た な 実際 か L ŋ そ が 国 ス 11 返 が 状 成 n 0 のところは し論 >衰退 長 それ は 態 寿 ひとつであり続 命 率 に 争 の比 7 衰退 Ū あ や教育など生 は の主題となってきたので て第三 る。 イ 11 る。 論 較 ギ は ij 0 あ 一世 広 世 5 ス イ 昇 が Ŵ け ギ に る事 活 7 紀末 1) 比 りや影響力を になると 水 61 ス ベ 実 準 7 に る。 が Œ な 低 相 0 照 面 対 水 イ つ う ギ 7 的 5 で 準

あろうか。トムリンスンによれば、衰退論は、二大政党制のもとでの競争的な選挙制度のなか で、政敵を攻撃する手段として誇張をともなって用いられてきたのであり、政治的コンテクス

となってきた。その論争にはいくつかの系譜があり、時代ごとに変化してきてい 戦後、 イギリスにお いては、衰退論は一九五○年代から一九九○年代まで、論争の主要な争点

トに適合した道徳的言説として見なさなければならないという。

ある。 心を生み出し、 しようとしたのである。もうひとつは、衰退の原因をイギリスと海外との関係に求めるも に求めるものであり、 一九五○年代に登場した衰退論には、二つの 型 がある。ひとつは、衰退の原因を労働 国際投資や金融サーヴィス業と関わりをもつ支配層に、ポンドの価値 結果として国内投資の水準を引き下げて低成長を招いたとするものであった。 労働者の態度や勤勉性を成長率に結びつけることで、産業 に対する異常な関 の衰退を説 組 明

会保障支出 一九七〇年代 、国有化というかたちでの公共部門の拡大を問題視する見解と、 [の増加というかたちでの公共部門の拡大を問題化する見解 に目立つようになったのは、 公共部門の拡大に原因があるとする説であ 0 双方が含まれた。 公共支出 、とりわけ社 そ

一九八〇年代に登場 したのは、 イギリスには 「反産業的文化」が染み うい ているという文化

一七世紀イングランド革命の不徹底性を強調して「未完のブルジョ

論的解釈である。

それは、

が議題に上るなかで、衰退への懸念が再び登場しつつある。

広い。 リズム」と見なされるものである。 的のもと、 ワ革命」が貴族的価値を温存させたとする解釈から、 ルの教育などを通じて上流階級エリートに実学軽視の傾向が浸透していったとする説まで、 代表的な著作コレリ・バ サッチャー主義者によって取り上げられることになった。「歴史家によるサッチ ーネット 『戦争の監査』(一九八六年)は、 - 古典教育を重視するパブリック・スクー 衰退論を煽るという目 幅

的に明らかにしている。こうした「衰退」論は、ブレア労働党政権下の一〇〇年ぶりの好景気 のなかで消滅したかのようであった。事実、デヴィド・エジャトンのように、衰退論を「反歴 ズムも、「脱工業化(産業空洞化)」というかたちで最も深甚な産業の衰退を招いたことを、 ことは難しいという。 これらの諸要因を厳密に検討してみると、原因と結果とのあいだには有意の関連性を見出す として批判して戦後史を読み替えようとする解釈も登場している。だが、近年EU離脱 トムリンスンは、「衰退」からの反転攻勢を掲げて登場したサッチ ヤリ

#### コンセンサスの変遷

戦後イギリスの政治史を「コンセンサス」という点から捉えようとする試みは、ポール・ア

「コンセンサス政治」が注目されるようになるが、ここで言うコンセンサスとは、統治のスタ ディスン『一九四五年への道』(一九七五年)を嚆矢としている。その後に歴史研究の対象として

る混合経済、 れたということである。 いくこと、第四に、福祉国家政策、第五に、外交政策の面における帝国からの撤退などである。 イルと政策的連続性の面において、保守党と労働党という二大政党のもとで共通の理解が見ら すなわち、 政策の面では、第一に、私企業による自由市場と国有化による公共企業体からな 第二に、完全雇用政策、第三に、労働組合を統治のパートナーとして組み入れて

をもとにした社会民主主義的な政策運営であり、保守党バトラーと労働党ゲイツケルの名を取 が、その後、 これらの政策の枠組みは、労働党のアトリー政権(第一章参照)によってつくられたものであ って「バッケリズム」と呼ばれた(第二章参照)。 保守党への政権交代があっても継続されることになった。それは、ケインズ主義

る。「衰退」が認識されるようになって、保守党と労働党内部で既存エスタブリッシュ とは異質の しかし、こうした戦後政治のコンセンサスは、一九七○年代になると動揺をきたすようにな 政治的分子が進出するようになり、戦後の社会民主主義的政策に疑義が提出される メント

ようになったのである。

の新自由主義的政策は、

後体制 衰退 働組合 保障体制を攻撃して福祉国家に楔を打ち込もうとしたのである。 ターを縮小し、労働組合の力を削減することで完全雇用を破壊し、 治に取って代わろうとした。経済政策としては、公営企業を民営化することによって公共セク 念の政治」を掲 代は党内外におけるヘゲモニーをめぐる争奪戦が繰り広げられていった。その標的としての戦 によって戦後コンセンサスは挟撃され、このイデオロギー的分極化を背景として、一九七〇年 労働党の内部では、 保守党の内部では、 九七九年の総選挙では、サッチャーが率いる保守党が勝利した。サッチャリズムは、「信 経 済 0 の交渉力を抑制して自由市場経済を導入する路線を追求していくニューライトが、 、に反転攻勢をかけようとする左派(ニューレフト)が進出していた。これらの異端分子 「コンセンサス」という言語が発明されたのも、こうしたコンテクストであった。 .げて対決型の政治スタイルを追求し、統治様式としての戦後のコンセンサス政 労働者による経営の民主的統制など社会主義路線 イギリス経済の衰退の原因をケインズ主義的な経済管理に見出して、労 普遍主義的原理による社会 の徹底強化をすることで、

社会不安などをともないながら、イギリスの社会構造を変化させていった。この金融サーヴィ

製造業から金融サーヴィス部門へ経済の重心を移動させ、

失業や

ス中心の経済は、一九九○年代になるとリーマンショック(二○○八年)にいたるまで経済の成

長軌道を作り出し、新自由主義を政策的コンセンサスとしていったのである。

調することもあるが、 路線をとるという意味合いであった。「社会投資型国家」としてサッチャリズムとの断絶を強 う「第三の道」とは、サッチャー流の新自由主義とも、伝統的な社会民主主義とも異なる中間 国家への回帰を唱えているわけではないので、サッチャーの政策を継承しているようにもみえ 一九九七年に労働党は、「第三の道」を掲げるブレアのもと政権に返り咲いた。ブレアのい 自由市場経済を是認し、完全雇用や労働組合との関係という面では福 祉

る。その点で、新自由主義的コンセンサスのもとで政策を遂行しているといえる。 本書では、戦後史を社会民主主義的コンセンサスとサッチャリズム以降の新自由主義的

センサスとのふたつの時期に分け、後者のコンセンサスのもとでの政治経済体制が動揺をきた しているという現状認識に基づいて、歴史的検討を加えていきたい。

# 空間認識としての「四つの輪」

なる議論を提唱した。

九四八年にウィンストン・チャーチルは、イギリス外交の基本路線として、「三つの輪